

# 秋室・明石大助の遺墨を訪ねて

梅 木 幸 吉

(別府市東荘園町)

秋室は佐伯文庫の書物奉行を十八年間の長きにわたって勤め、幕府へ献書の際は五万冊近い多数の蔵書の中より献書すべき漢籍を選んで献書目録を作制、二万七千五百十八冊の書籍を、佐伯から江戸まで運送方責任者としてその大役に尽力した人物で、姓は明石名は肅、字は大助

秋室はその号である。稀に見る俊秀の学者であると共に漢詩に巧み書家としても一家をなしていた。一寛政五年(一七九三)に生れ、慶応元年(一八六五)に没。享年七十三歳

去る一月であったか米水津村色利浦の民宿経営戸高又寿氏方に秋室の遺墨があると新聞紙上で知ったので、三月初め初春の浦代や色利浦の風物探勝を兼ねて戸高氏の宅を訪ねてみた。

秋室の遺墨は偏額(半折)でかなり古く煤けてはいるが文字ははっきりして能く読解できる。菊と蘭との墨絵がありそれに次の漢詩が草書体で書いてある。

秋風起兮白雲飛 秋風起つて白雲飛び

草木黃落兮雁南歸 草木黄落して雁南に帰る

蘭有秀兮菊有芳 蘭に秀でたる有り菊に芳しき有り

懷佳人兮不能忘 佳人を懷ふて忘るゝあたわす

泛樓船兮濟汾河 樓船を 泛べて汾河を濟り

橫中流兮揚素波 中流に横たわりて素波を揚ぐ

簫鼓鳴兮發棹歌 簫鼓鳴つて棹歌を發し

歡樂極兮哀惜多 歡樂極まり哀惜多し

少壯幾時兮奈老何 少壯幾時ぞ老いを奈何せん

この詩は中国の漢代武帝が河東に行幸し其の土地の神を祭った時に詠んだ「秋風ノ辞」といわれる古体の詩で二句と結句が八言ごんになっているのが古体たる所以である。武帝は漢の五代目の皇帝で普通世宗皇帝と称され前漢中興の英主として領土の拡張・文化の振興に力を注ぎ、漢の全盛時代を築いた英主で、文学を好み俊才を招

き楽府がよを設けるなどその功績は甚だ大きい。

語釈 今の文字が詩の中に九つ用いられているが、この文字は音はケイで音調をととのえるための助辞で特別の意味はない。これは楚辞に多く見られる傾向で、漢の高祖の有名な「大風の歌」にも「大風起兮雲飛揚威加海内兮掃故郷、安得猛士兮守四方」と三ヶ所用いている。

汾河、山西省の北部から西南に流れ黄河に注いでいる

川素波、白い波 棹歌、かじうた。船歌の意

懐佳人はランや菊のような忠実な家臣達のことを憶うの意。蘭は現在のランとは異なり、菊科の香草で、秋の七草の一つふじばかまであるという。

〈備考〉秋室の遺墨は武帝の原文通りではないようだ。四句の懐も憶の文字が用いてあるなど。尚、ランはふじばかまでなく蘭のスメエが書かれている。

この書蹟がいつどんな状況の下で書かれたのかかわからないが、秋室は書道を中年以後唐の懐素の書風を習ったというが、確に懐素の草書に法のつとった様子が窺われる。するとこれは秋室四十才すぎの書作であろうか（懐素の書

風を学んだ人として日本では良寛和尚が有名である）。尚秋室の遺墨は別府大学の学長であった故佐藤義詮氏が半折物一幅を所蔵している。其の半折写真は拙著「佐伯文庫の研究」に転載してある。

フジバカマ（藤袴蘭草） キク科

古名ラニ。源氏物語にラニの花といっているのは、蘭草の音読みである。秋の七草の一つとして知られているもので、形ヒヨドリとよく似ているが、下部の葉が三深裂し佳香があるので区別できる。秋日淡紅紫色の花をつける。

松田修著「花の歳時記」から